## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title            | 日本経済史学界における野村教授の業績  |
|------------------|---|
| Sub Title        | The contributions of the late Prof. Nomura to our study Japanese economic history                 |
| Author           | 速水, 融   |
| Publisher        | 慶應義塾経済学会  |
| Publication year | 1960  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.10/11 (1960. 11) ,p.956(144)- 964(152)             |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19601101-0144  |
| Abstract         |   |
| Notes            | 野村兼太郎博士追悼   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19601101-0144 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 日本経済史学界における野村教授の業績

水

速

融

機関誌である『歴史と生活』、その創立に当っては発起者の一人で あり、且つ戦後代表理事として君臨された社会経済史学会の機関誌 あった。即ち「旗本困窮の過程について」『三田学会雑誌』第二十 の分野に関する本格的な業績の発表は、昭和九・十年以後のことで 本主義成立史、および日本経済思想史に向けられている。教授のこ 巻第七号所収) る最初の業績を発表されたの は昭和四年、「我国に於ける近世的商 『三田学会雑誌』を始め、教授が主宰された慶應義塾経済史学会の 八巻第一号所収、 『社会経済史学』その他に洪水の如く次々と業績が発表された。そ 年譜の示すところによれば、野村兼太郎教授が日本経済史に関す -町人階級発達史序説-であるが、その後しばらくは、教授の関心は英国資 —」(『III 田学会雑誌』第二十九巻第二号所収)以後 昭和九年)を皮切りに、翌年の「大名貸について -」(『三田学会雑誌』第二十三

東洋経済新報社)となって集成された。 研究』(昭和二十四年、有斐閣)の大冊にまとめられ、特に徳川時代 の通史的著作としては『日本経済史(徳川時代)』(昭和二十二年、 は『五人組帳の研究』(昭和十八年、有斐閣)、および『村明細帳の 範囲はほぼ徳川時代に限定されていたことが知られる。これらの専 にも収録されている。また教授の収集された史料と、その史料批判 と』(昭和十五年、 封建社会の研究』(昭和十六年、日光書院)、 門論文の多くは、後に単行本としてまとめられている。即ち、『徳川 はないが、著作目録からも判断される如く、これらの専門的研究の れらを網羅的に紹介することはもとより本稿の目的とするところで (徳川時代)』(昭和二十三年、青木書店)、『維新前後』 (昭和十六 ヤモンド社)、『随筆 日本評論社)がそれであり、また他の随筆と共に『むかしと今 ダイヤモンド社ン、『探史余瀝』(昭和十八年、 文化建設』(昭和二十一年、慶應出版社) 『近世社会経済史研究

また、日本経済史の通史的著述としては、講義テキストとしての

**ものの他、『日本経済史』(昭和二十八年、有斐閣)は、刊行年月かものの他、『日本経済史』(ダイヤモンド社)は、全の大作と予定された『日本社会経済史』(ダイヤモンド社)は、全の大作と予定された『日本社会経済史』(ダイヤモンド社)は、全のの他、『日本経済史』(昭和二十八年、有斐閣)は、刊行年月か** 

この他、経済史プロパーではないが、『江戸』(昭和三十三年、至文堂)、および英文で発表された"On Cultural Conditions Affecting Population Trends in Japan." (The Science Council of Japan. Div. of Eco. & Commerce, Eco. Series No. 2) 1953, Tokyo. は主として徳川時代の人口について、特にそれが封建社会という組織の内でどのように動いたかを概説されたものである。

示される特徴を考察して行きたいと思う。とれる特徴を考察して行きたいと思う。というな業績に接それを急ぐ事を避け、むしろ全体として、教授のこれらの業績に重がいるかと言う事は、なかなか困難な仕事である。ここでは、直

\_\_\_\_

遺産について論じてみよう。教授はまず何よりも経済史研究――特二つに分け、まず史料収集およびその検討を通じて我々に残された学の発達にいかなる役割を演じたか。ここでは教授の業績を大きくさて、以上に示したような教授の尨大な業績は、わが国の経済史

のような史料の収集がある程度進行してからであった。 によって収集された史料に基いている。本格的な論文の発表も、 れないが、逆に開拓者としての苦心はそれ以上のものがあったに違 のものであっただけに、ある意味では収集の容易さもあったかも知 教授の収集は進められたが、現在とは違って近世文書の価値が未知 で続けられた。武家文書・商人文書・村方文書等の各分野に亙って 探し求めることが先決である。教授の近世文書収集は最近に至るま 開拓の分野に鍬を入れる決心をされたのであろう。何よりも史料を れて居り、このような日本経済史研究の状態にあき足らず、自ら未 西洋経済史の研究から史料の科学的利用の方法と、実証精神を学ば るが、近世史料学は未だ全く未開拓であり、当時の研究の材料とな 知る必要がある。今日でも確立されたと言うことは断じ難いのであ 績を除いて、 **究を始められ た昭和初期は、非常に僅か な例外、又は地方史的業** 方について、その方法を確立された。教授が日本経済史の専門的研 いない。教授の近世経済史に関する専門論文の殆んどは、自身の手 ったものは、農書や当時の識者の著書が殆んどであった。教授は、 に徳川時代のそれー 人文書等の根本史料はほとんど利用されていなかったという事実を 未だ徳川時代の経済史研究にはいわゆる村方文書、 ーにおける根本史料の重要性と、その取り扱い

旧家の没落から、史料の散逸が始まった時、小野武夫氏等と共に近も、一個人の力で収集し尽す事はできない。特に戦後の混乱期に、しかし、尨大な量に達する近世史料を、 如何に努力し た と して

一四五 (九五七)

か、計り難いものがある。 しめた事は、現在の研究者にとってどれほどの便益を与えている的組織の下に始められ、史料の価値、史料保存の意味を一般に知ら世庶民史料調査委員会を設けて、文書の保存・調査・整理を、全国

要な記事を含むにも拘らず、それに示されていると言うことだけで変な記事を含むにも拘らず、それに示されていると言うことだけででされている事は注意しなくてはならない。史料を一つの humanを入れて実証材料としての限界を明らか に された。『村明細帳の研を入れて実証材料としての限界を明らか に された。『村明細帳の研を入れて実証材料としての限界を明らか に された。『村明細帳の研を入れて実証材料としての限界を明らか に された。『村明細帳の研を入れて実証材料としての限界を明らか に された。『村明細帳の研を入れていると言うことだけで

究のいわば結論である事を考える時、我々は謙虚な言葉の中にも、 感情を廃し、科学的探求の確信を見出す事ができるのである。 注意しなければならない。従つてある村の明細帳ただ一冊を以つ ている。これが教授の長年収集とその検討を経られた村明細帳の研 てはならない。……」(『村明細帳の研究』四四―四五頁)と言われ まりにも急であるがために、全体として把握し理解することを忘れ やうになる。学問として分析はもとより必要である。だが分析にあ してゐるうちに、江戸時代の農村生活の状態を彷彿として描き得る 比較対照することは無用の業であらうか。……幾多村明細帳を渉猟 の価値の限界がある。……それならば村明細帳を蒐集し、それらを ことは、賛成し得ないのである。そこに「村明細帳」の史料として で、しかもそのうちの一項目を抽出していろいろなことを断定する が、その場合でも前掲の如く何年も同じ明細帳を繰り返して使用し、 断定を下す事の危険を説いて居られる。「要するに多くの同一村の 明細帳を比較してみると、その村の真相を明かにすることは出来る しかも問はれたことに対して常に消極的な答よりしてゐないことを

さに礎石としての役割を十分に演じているものであり、日本経済史言う事ができる。教授の業績は、このような全体としての進歩のま在でこそ、根本史料の発掘・整理・利用が進み、それに伴って日本在する、根本史料の発掘・整理・利用が進み、それに伴って日本ではなく、すべての文書、記録についても全く同様になされた。現

研究に大きな寄与をなした事は否定できない

---

足跡をたどってみよう。流行を避け、ひたすら自らの意のままに研究を進められた教授の

心の高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとないを含む)六十八篇を分類してみると、最も多いのは農民一揆に関するもので九篇を数え、ついで交通(助郷・水運)関係八篇、商業人口及び宗門人別改関係、幕政に関するものが続き、農村構成、旗人口及び宗門人別改関係、幕政に関するものが続き、農村構成、旗人の高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとなるの高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとないの高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとないの高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとないの高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとないの高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとないの高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとないの高い事を示すものではないが、一応の目安を与えるものとないの高い事を示する。

る。教授の場合、農民一揆に関しては、特に戦前の初期に集中して発表されているが、すべては資料紹介と言うべく、一揆の性格につって示されたと言った方が正しい。商業・交通に関するものの多い、大きに、教授の示された関心と、資本主義的発展のコースに関するも、教授の史観を表面に振りかざす積極的発言は見られず、むしろも、教授の史観を表面に振りかざす積極的発言は見られず、むしろも、教授の史観を表面に振りかざす積極的発言は見られず、むしろも、教授の史観を表面に振りかざす積極的発言は見られず、むしろも、教授の史観を表面に振りかざす積極的発言は見られず、むしろも、教授の実績は、教授が予定されていた五人組帳・村明細帳・宗門人別帳という近世村方文書についての史料学的検討三部作の研究によったもの、或いはなる予定のものであった。惜しむらくは最後の宗門人別帳については、いくつかの論文および筆写史料を残し、後の宗門人別帳については、いくつかの論文および筆写史料を残しながら、その集成は未刊に終ってしまった。

ら昭和初期にかけて、小野武夫・黒正厳・本庄栄治郎・土屋喬雄氏社会経済史資料紹介――の型で発表され、自身の収集された原史料を禁ってみよう。まず農民一揆についてみると、その殆んどが――を探ってみよう。まず農民一揆についてみると、その殆んどが――とのような教授の関心を個々に取り上げ、その主張されるところ

日本経済史学界における野村教授の業績

一四七 (九五九)

形成した。かかる状態に何らかの誘因が加はれば、それは直ちに騒 閣全書版、三〇八一三二一頁)とされ、一揆の革命性を強く否定さ 知れない。 然るに ここ に新しく対外関係を生じ、明治維新となつ 遠する。……多くの場合いくつかの原因が重なつて起つた。……百 動となり得た。百姓一揆の直接の原因はその個々の場合に依つて相 されたとしてよい。結論的には「かうした(江戸時代後半の一 論争が実証的内容を欠いていると言う考えから、その複雑性を主張 等によって研究が進められ、特に明治維新との関係をめぐって論争 揆となって現象せざるを得なかった社会不安が、幕藩体制を崩壊に る反感さへ生ぜしめたくらるであった……」(『日本経済史』有斐 的理念に基づくものが多く、単なる封建的仁政の要求か、又は圧迫 には少しも自覚した改革的色彩がなかつた。むしろ依然として封建 の状態が発展して行けば、結局何らかの社会的変革を惹起したかも 姓一揆は江戸時代初期にもみられたが、大体において後半幕末に向 用者)不健全な農村の状態はここに百姓一揆を惹起せしむる根本を が展開された。教授はこの論争に参加されたわけではなく、むしろ は単なる暴動に止まり、却つて秩序を求める民衆の間に暴動に対す に対する感情的爆発に過ぎなかつた。殊に幕末に起つた暴動の如き の農民運動が殆どすべて革新運動として適当な指導者を欠き、そこ た。百姓一揆は直接にはその改革運動とは無関係であつた。これら ふにつれて、一年に起つた数も多く、その性質も悪化した。……こ 、維新との関連も、少なくとも直接には認めてはいない。ただ一

導いたのであった。

村の姿が常に浮んでいたのであった。

商業・貿易に関するものは教授の専門的研究の核をなすものと言ってよい。特に戦後に発表された論文の多くはこの分野に属する最後の医の活動が明らかにされた。また教授の日本経済史に関する最後の屋の活動が明らかにされた。また教授の日本経済史に関する研究がそれであり戦前の太物問屋、地廻米穀問屋に関する論文と共に、江戸諸問屋の活動が明らかにされた。また教授の日本経済史に関する研究がそれのであり、特に戦後に発表された論文の多くはこの分野に属するものにあったことも、銘記すべきであろう。

国、特に大坂その他の関西商人であつたことである。……現にそのとめられている。「……江戸の問屋の特徴は有力な店舗の主人 が 他教授の江戸の問屋に関する研究は、『江戸』第七章江戸問屋にま

通じて消費者に供給するにあつた……」 されを仲買・小売の手を過ぎない場合がある。……勿論江戸商人として江戸に本拠を置いた主人が大坂・近江・伊勢等に居住してゐて、江戸は単にその出店に主人が大坂・近江・伊勢等に居住してゐて、江戸は単にその出店に

手としての役割を負わしめて居られる。この点独立自営農民の分解 礎は維新後の営利的活動と相関聯しこれに継続するものである。 る。徳川時代を通じて漸次に発達し、実質的勢力を獲得して来た所 ばならない問題は近世的商業の発生である。この点においてはわが 階級の勃興を中世都市の内に認め、商業資本に資本主義成立の担い …」「徳川封建社会の研究」三五九十六〇頁〉そして、教授はこの はない。しかし維新前に発達せる町人的精神、並びにその物質的基 謂町人階級は決して明治維新以後に活動せる企業家階級とは同一で 業の萌芽はそれよりもずつと以前に遡ってこれを求めることが出来 活動をなすに至つたのは最近のことである。……しかし近世的商 国と雖も同様である。……勿論わが国の商人階級が真に資本主義的 ものであると言わねばならない。日本における資本主義の成立に関 に資本主義成立の基軸を見る大塚久雄氏の見解とは根本的に異なる よりも重要視されている。既に『英国資本主義の成立過程』で市民 「近世資本主義制度の発達を研究せんとする者が必ず一瞥しなけれ 商業に関しては教授は資本主義の成立との関係から他のどの部門 教授は商業および商人の演じた役割を注目されている。

近世的商業の萌芽を足利末期―徳川初期の海外貿易の内に求められる。この海外貿易を担当した商人や、それを可能にした生産者が、る。この海外貿易を担当した商人や、それを可能にした生産者が、な近世的商業と封建制とが如何に身を処したか、さらには、このような近世的商業と封建制とが如何に両立し得たかと言う事を追求される。「その点を明かにするためには、一方徳川期における商業の真相を明白にすることと、他方農村生活の実情を調査する必要がある。」(同書、四〇六―七頁)とされ、徳川時代の商業・商人対策農村研究の基軸を据えて居られる。教授は、幕府の商業・商人対策農村研究の基軸を据えて居られる。教授は、幕府の商業・商人対策により、その独占排他性を強め、勢力の増大を押える必要が生じたにより、その独占排他性を強め、勢力の増大を押える必要が生じたのであった。

開発を請負ひ、又は廻船問屋として密貿易等に活躍したが、それら防、その資本主義成立への役割は英国の場合に見られるようなものが、その資本主義成立への役割は英国の場合に見られるい。「江戸と大坂とを二大中心とする商業の発展はここに商人層の発展を選びた。しかし狭隘な国内市場は後述する武士の困窮と農村の貨幣経に止まり、大衆農民の購買力は却つて低下した。一部の商人は新田に止まり、大衆農民の購買力は却つて低下した。一部の商人は新田路化はまり、大衆農民の購買力は却つて低下した。一部の商人は新田路化はまり、大衆農民の購買力は却つて低下した。一部の商人は新田路とは異なって、それ程高いものとは認めて居られない。「江戸と大坂とは、このような意図をもって商業・商人の検討を開始された教授は、このような意図をもって商業・商人の検討を開始された

日本経済史学界における野村教授の業績

なかったのである。

村明細帳・五人組帳に関するものはそれぞれ集成されて居り、いますのは、人口への関心と結びついている。教授が、人口変化を経済ものは、人口への関心と結びついている。教授が、人口変化を経済をあれていたところである。即ち、人と物の動きは、人口と物価の語られていたところである。即ち、人と物の動きは、人口と物価の語されているが、勿論とれが正確であろう管はない。教授はここでも限を細部の検討に向け、主として宗門改帳を徹底的に吟味されても限を細部の検討に向け、主として宗門改帳を徹底的に吟味される。その作成の手続・方法の検討から虚偽の記載の可能性とその事を曲げたことに依つて一層大となる。……宗門帳と現実の人口と物価の夢されているが、勿論とれが正確であろう管はない。教授はここでも限を細部の検討に向け、主として宗門改帳を徹底的に吟味される。その作成の手続・方法の検討から虚偽の記載の可能性とその事を曲げたことに依つて一層大となる。……宗門帳と現実の人口と物価の夢されているが、勿論とれが正確であろう管はない。教授はここでも限を細部の検討に向け、主として宗門改帳を徹底的に吟味されて居り、いま

に多い人口を数えたとされる。 に多い人口を数えたとされる。 無官が流入して、戸籍よりもはるかる人口流出のため、宗門帳記載の人口より少なく、逆に都市・町・る人口流出のため、宗門帳記載の人口より少なく、逆に都市・町・る人口流出のため、宗門帳記載の人口より少なく、逆に都市・町・る人口流出のため、宗門帳記載の人口より少なく、逆に都市・町・る人口流出のため、宗門帳記載の人口は男実人口よりも一割関東におけるある農村においては宗門帳人口は現実人口よりも一割に多い人口を数えたとされる。

関連で説かれたのであった。

一十も検討されている。教授は昭和二十九年、ローマで開かれた世十十出生率・死亡率・幼児死亡率・結婚 年 齢・通婚圏・出産 力等れ、特に「家」のあり方が実証されている。 又、人口学的諸指標れ、特に「家」のあり方が実証されている。 又、人口学的諸指標のような全体的考察と共に、当然農村の人口構成が取り上げら

授の徳川時代農村研究のいわばモデルケースであった

Ш

除いて、個々の問題を追求した専門論文に立脚したところの本格的 誌』第三十九巻第六号所収 だ、徳川時代の経済史について、敗戦直後公刊せられた『日本経済史 はそれらを無連関のものとして取り扱われたのではなかった。た が、それはそれとして、これらの諸問題は決して個々別々に追求さ 容を摘出して来た。勿論この他教授の活動は広範囲に亙るのである めに武士と百姓とは困窮し、町人は繁栄したといふ結論も概括論と (徳川時代)』一冊、および「徳川封建制度の特質」(『三田学会雑 者の未熟からそう言った印象を与える事を怖れるのであるが、教授 れたものではなかったことについて弁明しておく必要があろう。筆 る根本資料を漁りつつ、一方それらのうちに存する共通点に注意し にわが国の如き場合には甚だ単純ではない。……私はそれらに関す て結局貨幣経済の勝利に終ったとみることも誤りではない。そのた 会経済状態は米経済と貨幣経済との争闘とみることは正しい。そし な綜合を残されなかったこと、 また、 教授は自ら、「徳川時代の社 して間違つてはゐない。しかし百姓は困り、町人は栄えたといつて 以上教授の主として関心を寄せられた問題について個々にその内 仔細に検討すると、その困り方、栄え方にはいろいろある。殊 他方それらの千差万別の状態に多大の興味を感じつつある 『近世社会経済史研究』に収録)を

確かに教授は事実そのものの追求に全精力を傾けられた。「実際とうであったか」を明らかにすることが「どうしてそうなったか」とうであったか」を明らかにすることが「どうしてそうなったか」との困難にして無限の時間と忍耐強い努力とを必要とする仕事に何との困難にして無限の時間と忍耐強い努力とを必要とする仕事に何との困難にして無限の時間と忍耐強い努力とを必要とする仕事に何とか」が表情を表示した。大雄把な摑み方、少なくも断定をををした。から説かれ、一つ一つの現象の有する複雑多様性を力説せられる。たとえば、土農工商という序列が実質的には無性を力説せられる。たとえば、土農工商という序列が実質的には無権変失――分度生活――から説かれ、徳川時代の農民が土地に緊縛をれていたという説については、それを否定するいくつもの事例をされていたという説については、それを否定するいくつもの事例をされていたという説については、それを否定するいくつもの事例をされていたという説については、それを否定するいくつもの事例を

う言った「流行」には冷たかったと言える。戦前から華々しく続いは、それ自身として遂に追求の目標とはならなかった。これらは戦は、それ自身として遂に追求の目標とはならなかった。これらは戦また、土地制度・農民層の分解・農村工業といったようなテーマ

日本経済史学界における野村教授の業績

「五一(九六三)

のの追求が殆んどであった。際、教授の発表される論文は、他の何人もが容喙し得ぬ事実そのも接に参加されるのは勿論のこと、 関心さえも 示されなかった。 実まり興味を感じない」 とされている。従って教授は殆んど論争に直ているマニュファクチュア論争に関して「私は今それらの論争にあ

近い程困難であろうと思われる。しかし、そう言った限定にも拘ら 書を残されながら、恐らく教授にとっては日本経済史研究の総決算 の「描写」、それらを収録されたいくつかの論文集・教科書的概説 ためには神は教授に十分の時間を与えなかった。多数の個別的事象 屢々引用された ランケの "wie es eigentlich gewesen ist" 易な文章で描かれる。まことに教授の筆法は歴史を書くというより った空白を今後埋める事は、他人にとっては恐らく不可能かそれに である。そしてその構想の余りにもの大きさのために、未完成に終 てしまった。その意味では、教授の研究は未完成に終ったと言うべ とも言うべき『日本社会経済史』はごく僅かの完成を見たに留まっ ず何よりも sein であった。 勿論教授は恐らく sein の次には「ど という問いがその研究態度に貫かれている。教授にとって歴史はま は、「描く」と表現した方が正しいと思われる程であった。 教授の **うしてそうなったか?」が取り上げられたであろう。しかし、その** 教授は、こう言った歴史事実を、読者にそれを彷彿とせしめる平 その真意は遂に、直接には我々の眼に触れ得ない事となったの 教授の残された遺産は豊富である。まず何よりも、

> 差万別があって然りであるが、学問研究に対する態度、学者として であったと私には思われる。勿論その内容については、それこそ千 観の所産なのである。そして、最後に、我々の学びとるべきものは、 じられ、その全国的規模での組織化への努力、これらは教授の歴史 える。また教授の個人的努力によって収集された史料集の公刊、 実が展開されてから現在に至る何百年という距離を縮められたと言 科学的方法を吹き込んだパイオニアの一人としてその名を永久に留 つの目標であり、理想なのである 最期まで持ち続けられた学問への情熱である。晩年の教授にはいく さらには、ある点ではそう言った史料収集の個人的努力に限界を感 められるであろう。また、自ら描き出された豊富な史実は、その事 の打破、特に事実認識の方法に関しては、教授は日本経済史の研究に の生き方について、教授の示された範は、後学の我々にとっては一 れていた時こそ、教授が最も自らの生き甲斐を感じて居られた瞬間 にあっても、寸暇を惜しんで研究室で一枚の文書を整理され、 つもの公的な会合や任務が絶え間なく待ち構えていたが、そのさ中

として追憶を記したまでである。

意を損うものである事を怖れるのであるが、教えを受けた者の一人感を関る事が必要であり、そのためには周到な準備と綿密な検討とがを図る事が必要であり、そのためには周到な準備と綿密な検討とが

## 日本経済思想史研究を回顧して

島崎隆夫

日本経済思想史研究を回顧して